

Gentle Ballads <div>ジェントル・バラッド</div> Eric Alexander Quartet <div>エリック・アレキサンダー・カルテット</div>
1. ミッドナイト・サン・ウィル・ネバー・セツト <div>The Midnight Sun Will Never Set 〈Q. Jones , H. Salvador 〉(5:57)</div>
2. レフト・アローン <div>Left Alone 〈M. Waldron 〉(6:09)</div>
3. ジェントリー <div>Gently 〈E. Alexander 〉(5:19)</div>
4. ヒアズ・トゥ・ライフ <div>Here's To Life 〈Butler, Molinary 〉(6:59)</div>
5. ミッドナイト・サン <div>Midnight Sun 〈L. Hampton, S. Burke 〉(7:03)</div>
6. ハーレム・ノクターン <div>Harlem Nocturne 〈E. Hagen 〉(6:10)</div>
7. ソウル・アイズ <div>Soul Eyes 〈M. Waldron 〉(7:31)</div>
8. アンダー・ア・ブランケット・オブ・ブルー <div>Under A Blanket Of Blue 〈Neiburg , Livingston, Symes 〉(6:21)</div>
9. ストーマー・ウェザー <div>Stormy Weather 〈D. Ellington 〉(6:01)</div>
10. チェルシー・ブリッジ <div>Chelsea Bridge 〈B. Strayhorn 〉(6:52)</div>
11. ハーレム・ノクターン II <div>Harlem Nocturne II 〈E. Hagen 〉(5:34)</div>

エリック・アレキサンダー Eric Alexander （tenor sax）
マイク・ルドン Mike LeDonne （piano）
ジョン・ウェバー John Webber （bass）
ジョー・ファンズワース Joe Farnsworth （drums）
録音：2004年3月1、2日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studio in New York on March 1 and 2 , 2004.
Engineered by David Darlington.
Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Cover Photo : © Jeanloup Sieff / G. I. P. Tokyo.
Photos by John Abboff. Designed by Taz..

いやまあとにかくこんな感じで、一曲一曲どれをとっても魅力満載の今回のエリック盤、どのようにして吹き込みが実現したのか、そのへんをかいつまんでお知らせしよう。

ところは赤坂の「ビー・フラット」、去年だったか来日公演の折、エリックは「イツ・マジック」を吹いた。もちろんそれはバラッドであり、案の定涙の出るほどよかったのだ。テーマがジワーとした感じで。そうなのだ。エリックのバラッドのよさはいつだってジワーという感じのよさなのだ。

そこで休憩時間、たまらなくなって私はエリックに進言したのである。

「エリック、バラッド集を作ろうよ」

「エッ、バラッドか。ハリー・アレンみたいにか」

このエリックの返答には笑ってしまったが、たまたま傍らにいたグイナスのオーナーが「おお、それいいじゃあないか」と強力にプッシュし始めたのである。そうなるとエリックも真剣にならざるを得ない。

2カ月ほどしてオーナーから電話が入った。

「バラッド、とってくるよ」

「えー、本当、実現したんですか。じゃあ一つ頼みがありますよ。リクエストをお願いします。いま一つ凝っている曲があって、それは『ミッドナイト・サン・ウィル・ネバー・セツト』なんだけど、ぜひエリックにやってもらってください」

「OK、OK、がってん承知の助」

安請負いしたけど、大丈夫かな、録音現場の混雑で忘れてしまうかもしれない。まあ、約束は水ものだ。

ところが、実際、この通り、私のリクエスト曲がちゃんと入っているではないか。おまけにミッドナイト・サンついでにライオネル・ハンプトンの作曲した「ミッドナイト・サン」まで入っているというサーピスぶり。

あなた。そう、あなたです。よくぞ、これをお買いになった。おめでとを申し上げよう。お目が高い、とちょっぴりお世辞も言わせていただこう。

いやいや、私も実はいまこれを聴いて感激しているところなのである。久々にいいCDを耳にしたなあ、という嬉しさ。そして、あとどのくらい生きられるか分からないが、あっ、そうだ、あれがあったなと思い出して取り出し、CDケースに収めてやっぱりこれだよなああとニンマリする、そういうCDがこのエリックのバラッド集なのである。

もうはっきり言わせていただければ、数あるエリックのCDの中で、いいとかよくないとかそういうことではなくて、私はこのCDがいちばん好きだ。好き嫌いの問題。コルトレーンの諸作品の中でインパルス盤の『バラッド』が好きとおっしゃる方が多いのと同じ理由と言っておこう。

つまり理屈じゃないんだ。作品の評価とかそういうことでもない、なにが自分にとって大事なもの、という感覚である。バラッドというものをジャズ・ファンはそんな気持ちで愛してきたのだと思う。バラッドはジャズという音楽の中で特別の領域ということだ。愛すべき領域。

さて、私はエリックの音楽を90年代の初めからずっと聴いてきたが、いまもって速い曲よりもバラッドが好きでたまらない。過去のCDを取り出しても必ずバラッドの曲のボタンを押している。

エリックのバラッドのどこがいいのか。

まず曲の解釈である。この曲ならこういうふうにメロディーを紡いでゆきたいというエリックのやり方に降参なのだ。原メロディーを自分流に変えて人を驚かせてやろうなどというハツタリはない。濃くオリジナルの曲想を大事にしているのが分かって、そこが曲好きの私などはまず嬉しいのである。

エリックがバラッドを奏するテナー・サックスの音。これが第二の美点である。エリックをアメリカから呼び寄せて各地のライブハウスに紹介するモンプロダクションの人が言っていたことだが、エリックほど練習に余念がない人はいないらしい。「練習の人」なんだということらしい。練習はほとんど音のためにある。エリックは実にサックスの音を大切に思うミュージシャンなのだ。

バラッドに音がどのくらい重要なものか、はっきり言って速い曲ならある程度ごまかしがきくが、バラッドはそうはゆかない。一言一言がとてつもなく重大なのである。なにしろ聴いているほうは音を一個一個ためつすがめつするんだから。急テンポの曲ならすっ飛ばして聴くけれども、エリック聴くなら音で聴け。私はそう申し上げたいのである。

中身のぎっしり詰まったテナーの音で奏でるバラッドのすばらしさ。それがエリックのバラッドのすばらしさ、なのである。

具体的にゆこう。「ソウル・アイズ」に耳傾けていただきたい。もちろん出だしである。作家が一行目に生命をかけるように、テナーマンは一音目に意を注ぐのである。

私のスピーカー、ドイツのアバンギャルドではゾリッという雰囲気音が出てくるが、皆さんのところはいかがだろうか。ひげそりあとのアゴをなでるようなこの感触にいったんはまると、ジャズ・ファンはジャズやめられないのである。

ジャズのあらゆる大きな魅力の一つとして、テナー・サックスのこの「ゾリ」が厳然としてそびえ立つのだ。誰も否定できない。ゾリなくしてテナー・バラッドの魅力なし。この点ではコルトレーンの『バラッド』より上。

出だしに生命をかけるといえば、ピリー・ストレイホーンの「チェルシー・ブリッジ」に思い切って驚いてくれ。私はこの出だしゆえに古今東西の「チェルシー・ブリッジ」のトップにエリックを置きたいと思う。このディーブ・スロートは濃い。こんなテナー・ジャズ聴いたことがない。テーマ部分の音の振幅の大きさ、低いところから高いところへの急転直下の移動、これがエリックのスキル、そして腕の見せどころの一つである。

諸君は思うに違いない。そんな個人的な話はどうでもいいよ、自慢話に付き合っているヒマはないよ、と。

悪い、悪い。すべてのエッセイは自慢話であると喝破した人がいたが、すべてのライナーノートも自慢である。許されよ。なにしろ人間60歳も後半にさしかかると、自慢だらけになってしまって。

「ミッドナイト・サン・ウィル・ネバー・セツト」はクインシー・ジョーンズの作曲である。あの『スマック・ウォーター・ジャック』などのフージョン作品を作って後年晩節を汚した？人である。若い頃はこんな心にも染みる曲を作曲する心の澄んだ男だったのだ。心の澄んでない人間にこういう曲が書けるか、エッ！　と私はまなじりを上げたいのである。

それほど美しい曲だ。北欧の白夜をこれほど幻想的に表現できる作曲家がいるだろうか。私はスウェーデンのオキ・ベルソンというトロンボーンの人と同曲を最高と思ひ、ずっとこれまで愛聴してきたのである。やっぱりこの曲は北欧の人でないとなあ、と思いつつ。

しかし、アメリカ人が北欧の人を敗ってしまったのである。

この曲はトロンボーンの曲と確信していたが、実はテナー・サックスの曲だったのだ。そしてこれはまさしくエリックの曲だったのである。

もうこれで何回聴いたろう。私は初めてこれを聴いた時、思わず歓声を上げてしまった。「やったあ」である。オレがこう吹いてくれと願ったようにエリックは吹いてくれたではないか。一音たりとも崩すではないぞ。この美曲をデフォルメしたら作曲者のクインシーに申し訳ない。そんなことは分かっているとばかりに、エリックはいっさい色付けせず、虚心坦懐に作曲された通りの旋律を吹いた。こだわりを捨ててさっぱりした気持ちで吹いている。それが成功したのである。「PCMジャズ喫茶」というチューナーがないと聴けない放送で、この曲をかけた。ゲストの岩浪洋三さん、長澤祥さん、それに私、3人が声を揃えて「いいねえ。」それしか言葉にならないのである。じんわりと温かい気持ちで耳を澄ませたのだった。

「ハーレム・ノクターン」が2曲入っている。2曲挿したエピソードを現場で見ていたオーナーに聞いた。録音2日目である。最初にこの曲にとりかかったが、どうも早朝のことでもあり真夜中の曲のムードが出てこない。エーイ、こうなったら早朝の「ハーレム・ノクターン」だとばかり、少しスイングのテンポで全員が演奏を行なった。それで吹っ切れて夜中のムードの同曲が出来上がったというのである。

スインギーなほうはもちろんトライアルであり、録音を意識したものではありませんでしたが、オーナーが気に入り、ボーナス・トラックとしてはめ込んだというわけだ。このあたりの「偶発性」が面白く、これが「ジャズ」だと感じ入ったのである。

シャーリー・ホーンの持ち歌だという「ヒアズ・トゥ・ライフ」を、私は今回「自分の新曲」として大いに気に入った。そういえば、ステファノ・ポラーニの新譜では彼自身が歌っていたっけ。今後このCDを取り出すたびに、まず「ミッドナイト・サン・ウィル・ネバー・セツト」、次に「ヒアズ・トゥ・ライフ」のセットで聴くだろう。

エリックの作品が1曲加わっている。彼のオリジナルが1曲もなかったら、このCDはなんとなく寂しいものになっていた。よかった、よかったである。

こう言うてはなんだが、エリックのテナーは濃いが作曲はいま一つというのが私の抱いていた印象だった。しかし、おう、この「ジェントリー」のなんと「いい曲」であることよ。

私に言わせれば、これ、エリックのベスト・コンボジションである。今度会ったらほめてやろう。「ユー・ライク・イット？」顔をほころばずのが目に見えるようである。

もう一度言おう。

これ、私にとって、エリックのベスト盤。なんとなればエリックはバラッドの名人だからである。

〔寺島靖国〕